

minority

— 疎外感を題材とした作品制作 —

芸術研究科 造形表現専攻
芸術表現領域 博士前期課程
2025年3月修了

竹田 康人

主査 渡抜 亮 副査 Robert David Platt 国本 泰英

研究背景

「疎外感」という今回の研究テーマは、私がこれまでの生活の中で一番感じている感情を形にしようと始めた研究である。私の中に強くある疎外感という感情は、育ってきた家庭環境の中から生まれたものだが、この感情は誰しもが抱えているものなのではと考えた。このどこにもぶつけることの出来ない、溜まり続ける感情を作品に昇華しようと考えた。

研究目的

疎外感を感じる場面や出来事を直接作品に表現せず、別の形で表現できるように取り組んだ。疎外感は身近なところにあり、人間関係が広がる・社会に対する解像度が上がる という行為で疎外感は生まれると考えるがこれを如何にして形にするか、考え制作した。また、私は疎外感を感じたら、これ以上感じないように周りに合わせようとする・溶け込もうとする・擬態するという行動をとる。これらも作品に表現できるよう取り組んだ。

研究概要



成果・まとめ

幾何学的な図形は身近にあり、平面上に無限に拡大し続けることができるため、作品の表現に適していると考えた。拡大し続ける図形の中に、素材や質感が異なるものを入れることで、異質なものが溶け込もうとしている・擬態しようとしていることを表現した。今回の制作において、テーマである「疎外感」という感情はネガティブな感情に対し、作品からはネガティブさを感じられない。今後の制作においてネガティブなものも表現できるように突き詰めていく。



指導教員コメント

幾何学的な数学的要素に人間の感情という主観的で有機的な要素を投影していくという、一見すれば相反するようなテーマの組み合わせが非常に興味深い作品である。竹田さん自身の主観的な感情と経験を主軸に据えることにより、リアリティのある疎外感が表出されていると同時に、俯瞰した視点を大事に制作されていると感じる。鑑賞者が紐解いていきたくするような反復と拡大の形態が表現された繰り返される形と冷静さを持った作品は、迷宮の導入のような響きをもって鑑賞者を包み込むようだ。

渡抜 亮